
猫の墓

ミスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の墓

【Nコード】

N8456M

【作者名】

ミスター

【あらすじ】

猫の血を引くという一族 永峰家。一族を滅ぼされたただ1人生き残った『猫』ノシロ、そして人間 ウエキ。2人の関係は一族の滅亡の日まで遡る。

1 出会い（前書き）

かつて、代々猫の血を引くという一族があった。

永峰一族と名乗るその一族は、人間の言葉を話し理解し、人間のよう
ように生き、そして人間と共存していた。

しかしある時、人間たちの手により、一族はたった一人を残して
滅んだ。

神よ、何故あの時、あの子の命を奪ってしまったの
だったのだ。

編集 2011・6・13

1 出会い

「雨だ」

彼女がそう呟く少し前から、小さな雨粒が、柔らかく二人を包んでいた。一人は女で、湿気のせいか、元々なのかはわからないが、栗色の髪が所々跳ねていた。もう一人は黒づくめの男で、ぼろきれのようなマントを被っている。男はまるで女が存在していないかのように、自分の世界に浸っているように見えた。

この二人は、汚い路地裏に座り込んでいた。男のほうは場所相応といった格好だが、女は清潔な格好をしていた。白い長袖のワンピースには、綺麗な刺繍が入っている。それが汚れるのも気にせず、女は尻を地面に乗せている。

「ねえ、私傘持つてるよ。入る？」

女が男の様子を伺うように言ったが、それは気を遣っていないように聞こえた。

「断る」

「あ、ひどい」

女は脆そうな折りたたみ傘を静かに広げると、もぞもぞと横に移動して、小さなそれに、彼と一緒に入り込んだ。

「なんのつもりだ」

「雨、嫌いでしょ」

「何故そう思う」

「だって君、猫なんでしょ？」

「……」

「わかってるもん」

傘がゆっくりとポツポツと音をたて始めた。これから本降りだ。空は黒に近い灰色に染まりかけていた。夕立、だろうか。傘からはみ出た二人の肩が黒くなっていく。

「名前、なんて言うの」

女が問うと、男はますますむっとした。

「人間なんかに、言いたくない」

「やっぱり君猫なんだ」

この路地では、人通りは少ない。ましてこの雨だ。男は周りを素早く見回すと、ぼそぼそと呟いた。

「永峰ノシロ」

「うん。私、ウエキ」

雨はやがて、本降りになった。

2 ウエキ

「ノシロー！」

遠くから聞こえた弾む声に、ノシロは顔を上げた。満面の笑顔の彼女は、両手いっぱい紙袋を抱え駆け寄ってきた。彼の表情は変わらない。ノシロは常にこの路地裏に居座っている。ほんの少し明るすぎる彼女が毎日のようにノシロの元にやってきても、彼はこのお気に入りの場所を他の家無し人に譲る気は毛頭無かった。

「食べ物買ってきたよ、食べる？」

所々跳ねた栗色の髪も気にせず、彼女はノシロの横に勢い良く座り込んだ。乾いた泥が彼女の上着を汚したが、特に気にした様子もなく、よれた紙袋を漁り始めた。

彼女の名は、ウエキといった。

「ツナかシャケ、どっちにする？」

「ツナ」

無愛想に答えた彼は、フードのついたマントを深く被った。艶やかな黒髪が太陽から逃れる。マントは使い古されくたびれていて、ゴミと呼んでもいいようなぼろ布で出来ていた。だが彼は気にしていないようで、むしろそのマントを好んで使っているようだった。

「はい、どうぞ」

ウエキは柔らかい蓋を持ち上げ、銀色のスプーンと一緒に差し出した。わざわざ、彼女の家から持ち出したのであろう。ノシロは無言で缶とスプーンを受け取り、ツナをとにかく掻き込んだ。その際に、尖った犬歯が覗く。

「んねーえ、ノシロ」

「にゃんだ」

ツナを口いっぱい頬張るノシロ。

「ノシロは、人間が嫌いなのか？」

「当たり前だ」

ツナ缶はあっという間に空になって、乾いた音を立て缶を地面に置かれた。ノシロは、濡れた口を親指で拭った。

「一族を皆殺されたんだ。お前ら人間にな」

「でも、もう十年も前の話だよ？」

「何年前だろうが、関係ない」

ノシロが吐き捨てるように言うと、彼女は幼い顔をつまらなさそうに歪ませた。

二人がああ雨の日にこの路地裏で出会って、半年が経とうとしていた。ウエキという女性は本当に好奇心が旺盛で、そして誰に対しても平等の考えを持っていた。他から見たら家無し人のノシロに対しても、それは同じだ。

「猫の、一族だっけ？ 猫の血を引いてるってことだよな？ でもそれって、いったいどこのタイミングで、猫の血が入ったんだろう？ だって、猫と子供を突作るうったって、いったいどうやってするんだろう？ ね？」

そこまで一息に言うってから、ウエキはノシロの顔を覗き込んだ。

ノシロは彼女の茶色の瞳に一瞬だけ目をやって、それからまた空を見た。ウエキはそれに構わず、あっ、と思いついたように声を上げた。

「もしかして、猫の耳とか、しっぽってある？」

ウエキは今までに見たことがないくらい目を輝かせてノシロを熱い視線で見つめた。ノシロは観念したのか、うざったそうに小さく呟いた。

「耳なら」

「うそーっ！ 見たーい！ フード取ってよー！」

彼の鼓膜の事など考えず、大声を張り上げた。

「……静かにしろ！」

「なんでなんでー！ 見たい見たいー！」

「あんなあー！」

ノシロは自分の口に人差し指を合わせる。ウエキはその人差し指に一瞬驚きながら、大きな瞳をくりくりさせてぼかんとした。

「俺が猫の一族って事は、お前以外の人間には秘密なんだ。例えばお前でも、簡単に見せるわけにはいかない。もし他の人間に見られたら……」

「じゃあいつなら見せてくれる？ 夜？ 明日のほうがいい？」

「……」

ウエキの瞳はまだキラキラと輝いている。無防備な笑顔を振りまき、ノシロにぐいぐいと顔を近づけてくる。彼は堪らず彼女を押しつけた。

「とにかく、今はダメだ！」

「ぶー！ ノシロのケチー！」

3 闇の夜

傾いた三日月が、うつすらと夜空に浮かぶ夜。人々は皆家に帰る。ウエキ、彼女にも家がある。俺には無い。家の無いものはそこらを徘徊し始め、食べ物を探す。売ることの出来るものを探す。

いずれも、ノシロが探しているものとは違った。

ノシロは路地裏の奥の暗闇で目を光らせていた。そこには、塗装が剥げ、錆に囲まれたゴミ箱が放置されている。このゴミ箱の存在は完全に忘れられており、誰も回収に來ない。このゴミ箱が存在することは、ノシロがこの路地裏に好んで住み着く理由のひとつである。

「……あつた」

彼は呟きながら、大量のゴミの中から、黒光りする長いものを引き出した。それは、ノシロの身長くらいあるのではないかというくらい長さであった。それを僅かな月の光にあて、ノシロはしばらく眺めた。

それは、刀であった。

その長い鞘には金具が等間隔に幾つも付いていた。その金具を外せば、刀をわざわざ抜かなくとも、素早く取り出すことが出来る。ずいぶんと年季が入っているようで、金具はほとんど色落ちして、小さな錆が出来ていた。

ノシロは短く息を吸って長く吐き、刀を愛でるようにゆっくり撫でた。

俺には、やるべきことがある。

ノシロはぼろきれのようなマントを素早く脱ぎ捨てた。その頭のほぼ天辺から、音も無く黒い猫の耳が現れる。彼の全身スーツの背中には溝があり、そこに、金属音を立てながら長い刀を装着した。

永峰家の滅亡に関わった人間、全員。必ず全員、この手で始末す

る。それが、猫の一族でたった一人残されたノシロの、やるべきことであった。少なくとも、彼はそう信じていた。

一人残らず、必ず。それが俺の、生きていく糧になる。ノシロは歪んだ三日月を今一度見つめると、闇へと消えた。

編集 2011・8・6

4 隠し事

「ノシロ〜!」

いつものように手を振り、駆け寄ってくる彼女。

「ねえねえ、今日は猫耳見せてくれるっ?」

「ダメだ!」

「〜、ケチーっ!」

ウエキはノシロの隣に座ると、小さく伸びをした。

「…男性2人が、斬殺だつて。ニュース見た？」

ウエキが空を見上げながら言った。

「ここでニュースが見られると思ってるのか」

「あはは、確かにそうだね！」

ウエキが手のひらを口の横に持ってきて、小さく言う。

「2人とも、猫の一族の殲滅を執行した人なんだつて。
…ノシロがやったの？」

「……………」

「殺したんだ？」

「…だとしたら俺を軽蔑するか？」

ノシロは正面を見据えたまま低いトーンで言った。

「ううん。」

人を殺しちゃうのは良くないけど、私がもしノシロと同じ境遇になったら、ノシロと同じことをするだろうから。」

「…そうか」

「……………」

「……………」

「良い天気だねえ」

「だな」

ノシロも空を眺める。

建物の関係で日光は2人に当たらないが、空には雲1つ無かった。

「…あの日も、たしかこんな天気だった」

と、小さく呟くウエキ。

「…あの口？」

「…えっ！？ あっ、えっ、別に！！
きつ気にしないでっ、ただの独り言だから！！！！」

ウエキは無駄に腕を動かす。

「……………ほんとか？」

「……？」

ノシロは腕を組むと、首をかしげた。

5 警察署長

しかしその次の日だった。

全てが何もかも変わったのは。

「それでね、その人ときたら
」

ウエキはいつものようにニコニコと笑顔を振り撒きながら、口を動かす。

「ねえ ノシロ、聞いているのっ?」

「聞いている、近所に住む恰幅の良い女性の話だろっ」

「なんだ、聞いてたの」

「…なんだその言い方っ!」

「キヤーっ、ごめんなさーい!」

ノシロはため息をついた。

「…あ、初めて笑ったね」

ウエキがそう言った。

「え？」

「ノシロ、笑ったよ」

「お 俺が？」

ほぼ無意識だった。

「……………笑う…か、俺が……………」

「なに考え込んでんのさー！
笑うことは良いことだよ？ だってさ、幸せな気持ちになるじゃん
！」

ウエキは伸びをした。

「きつとね、思うよ。
自分だけじゃなくて、他の誰かも幸せにしたいって」

「……………」

「ね、ノシロ。」

人の幸せを願うことって、よっぽどのがない和有り得ないと思
ってたんだ。

でもね、私はノシロに幸せになってほしい!」

ウエキはいつものように、ニコツと笑った。

「ノシロは私にとって、大切な人だから!

だから、幸せになってね」

そんな笑顔はどこか寂しくて……。

ノシロは、無意識に口を開いていた。

「俺は……お前に」

「ちょっといいかな、君たち？」

ノシロは物凄い勢いで振り返った。

男が、1人。

隣で小さく息を飲む音が聞こえた。

「人捜しをしないでね。
ちよつといいかな」

「お前、誰だ」

ノシロは間髪入れずに言った。

「ああ、すまないね。では自己紹介を」

座り込む2人の視界に、くすんだ紺色が飛び込んできた。

硬そうな帽子から、少ししわのある男性の顔。

「警察署長、間城タガミ」

相手の顔からにやり、と笑みがこぼれた。

「…用は？」

猫は警戒の目をやめない。

「実は人を捜していてね。ある事件を起こした少女なんだが」

タガミは胸ポケットから写真を取り出す。

「この子だ」

小さく微笑む、少女の写真。

クリーム色の髪は小さく跳ねていて、少しだけ大人びた表情からは、子供なりの正義感が溢れていた。

「彼女の名前は、ハギノ。当時、14歳だった」

タガミは写真を地面に静かに置いた。

「もう10年も前の話だがね……」

タガミは立ち上がった。

「君たちも知ってるだろう？」

『猫の一族』の、滅亡を「

「……………」

ノシロは目を見開いた。

「猫の…一族」

「まあ彼女は猫の一族を守ろうとしただけなんだがね…」

タガミは空を仰いだ。

「10年前のあの日も…よく晴れた日だった」

「あの日…?」

フード越しに、ノシロの耳が小さく動く。

「お前……」

「一族の滅亡の日を知ってるのか?」

ギロリと睨みつける、猫の目。

「…気になるか?」

深い黒の瞳がノシロを見下ろした。

「…もっ、もっいいじゃん、ノシロ」

黙りこくっていたウエキが、突然小さく叫んだ。

「私たちは、その写真の子なんか知りません！

行こう、ノシロ！！」

ウエキはノシロの腕を持ち上げると、歩き始めようとする。

「おいっ、ウエキ！」

腕を引っ張られるがまま、ノシロは小走りでウエキについていった。

「ウエキ、か…」

タガミはいやらしく笑みを浮かべた。

6 ハギノ

「おい どうした、ウエキ？」

ウエキは何も言わずに早足で歩いていく。

「ウエキ！」

その声で、ウエキの足が止まった。

「なんなんだよ、いったい！」

「……………」

小さくうつむくと、ノシロの手を放した。

表情は確認できない。

「…知ってるの」

「え？」

「今の、タガミって人」

「え…？」

ウエキはうつむいたまま。

「ごめんねノシロ…

ごめんね…」

「なんで…謝る？」

ウエキは、ゆっくりと振り向いた。

今までに見たこと無い、悲しそうな顔。

「見つかるなんて思ってなくて…」

「おい…何を言ってる？」

両手で顔を押さえながら、ウエキは小さく呟いた。

「ハギノは私なの」

「ハギノ　って、さっきの写真の？」

「ひひ」

でも…さっきの写真。

全く今の面影は感じられなかった。

似ているところと言えば、あの小さく跳ねた髪……。

「写真の顔は、確かに私の顔だった。昔の顔だけど……」

「昔の…顔？」

まるで、昔は今と違う顔だったかのような言い方……。

「……お前、もしかして」

「馬鹿でしょ。整形したの」

ウエキの瞳に、うつすらと涙が浮かぶ。

ウエキの表情を伺いながら、ノシロは恐る恐る言った。

「……猫を守るために、人を殺した……って？」

ウエキは壁に寄りかかり、ずるずると背中を引きずって、ぺたんと座った。

「ホントだよ」

ノシロはその言葉を聞くと、ウエキのそばに座った。

「……もう10年も前の話。私が14歳の時だった」

ウエキはゆっくり、はっきりとした声で語り始めた。

7 過去

当時 猫と人間は、ほぼ同じ環境で生活していたんだ。

文化の違いこそあったけれど、人間の領域に猫が入り込んでも全く違和感はない、そういう世界。

そんなとき、私は迷子になった子を見つけた。

10歳くらいの男の子だったかな、猫の一族の子だった。

でね、その子と一緒にお母さんを探したんだ。

結局、その子がお母さんと再会できたのは日が暮れてからだったけど。

綺麗なお母さんだった。

人間の女性だったけど、息子の名前を何度も呼んで、いとおしそつに抱き締めていた。

それから半年も経たないころ、猫と人間の関係が悪化した。

理由は、猫の一族が、絶望的な食糧難に陥ったからだった。

猫は人間に助けを求めた。

でも人間は、彼らを救おうとはせず、ただ黙って見てるだけ。

それからだった。

猫の一族と人間は反発を始めた。

猫の一族の、滅亡の始まりだった。

両者間で戦争が起きた。

人間が、猫の住む場所へ攻め込んで来たんだ。

私はすぐに、その戦場へ向かった。

猫の一族を殲滅するなんて 許せなかったから。

人間が一方的に悪いってわけでもないけど、何も殺すことないじゃない…

戦場に足を踏み入れると、そこには地獄が広がってた。

攻め込む人間たち、反発する猫の一族。

戦術に長けた一族とはいえ、人間の造り上げた銃器には負ける。

倒れる人の数は、圧倒的に猫が多かった。

私は駆ける。

聞こえはしないだろうけど、やめて、やめて、って、必死に叫んだ。

その時だった、私は、あの猫の子を見つけたんだ。迷子になった猫の一族の子。

その幼い少年に銃口を向ける人間がいた。

42

名前はタガミ、今の警察署長。

当時 特殊部隊の隊長を務めていて、猫の一族の殲滅に参加したと聞いた。

私はタガミに飛び付いて、叫んで、なんとかその子を守ろうとしたんだ。

そしたら、違う人間が、猫の子に銃口を向けていて

一瞬の出来事だった。

気付けば、私の腕にはタガミの銃。倒れたのは、猫を狙った人間。

私はタガミから銃を奪って、猫を殺そうとする人間を、殺したんだ。

それから、その猫の子が結局どうなったのかはわからない。

私がタガミに取り押さえられている間に、誰かに撃たれて、死んでしまったかもしれない。

わからないんだ。

殲滅、戦争は終わった。

私は警察署長である父の手を借り、名前を変え、顔を変え、速やかに街を出た。

父がその後どうなったのかはわからない。

「本当に酷い一日だった」

いつの間にか辺りは影で覆われていた。

鮮やかな紅い夕日が、2人の真上に射し込んできている。

「でもね、あんな事があっても、なんだかんだでこの街が大好きなんだ、私」

ウエキは紅い空を見上げた。

「だからね、戻って来ちゃった」

微笑むウエキの顔には、少しだけ、悲しみが混じっていた。

ノシロは、ただずっと黙っていた。

一言も言葉を発する事も無く、ウエキの横顔を、ただ眺める。

こいつの名は、本当はハギノと言うのか……。

とにかくウエキの言うことが、今は嘘だとは思えなかった。

冗談好きな奴だが、ウエキの表情を見ると、そうでは無いのだろう。

「お腹、空いたね」

突然ぼつり、とウエキが言った。

「…そうだな」

久しぶりに声を出したので、彼のそれは掠れたものになった。

「何か、買ってくるね」

そう言ってウエキは立ち上がると、路地を立ち去った。

8 別れ

『ね、君、いくつ？』

『じゅじゅ』

遠い遠い記憶。

今となつては淡い記憶。

『ねえ、お姉ちゃんと一緒に
』

朝の匂い。

少しじめっとした、澄んだ空気の匂いだ。

でも、そこに何か違う匂い

人間？

ノシロはハッと目を覚ました。

右肩を見ると、もたれ掛かってくるウエキ。

「……………」

小さく寝息を立て、完全に寝入っている。

彼女の周りには、空になったツナ缶が散乱していた。

そうだ、昨日　ウエキが何やらツナ缶を大量に買ってきて。

食べて、そのまま眠ったんだ。

彼女に対してあまりに無防備だった自分に驚く。

昔の俺なら、人間と一緒に寝るなんて事は無かった。

確実に、俺の中の何かが、変わってきている。

人間に、ウエキに対する気持ち、変化してきているんだ。

そんなことを考えながら寝顔を眺めていると、鼻がもぞもぞと動いて、薄く瞼が開かれた。

「……………起きたか」

「……………ノシロ…………？」

再び目を閉じ、ウエキは小さく息を吐いた。

その吐息混じりに、掠れた声が聞こえた。

「お母さんは見つかった…？」

「…？ ウエキ？」

「ん…？ な…に？」

お母さん……？

昨日の事を思い出しているのだろうか。

あの、迷子になったという猫の一族の子を

眩しそうに目を細めると、跳ねた髪で頬を攻撃してくる。

ノシロはウエキの攻撃から逃れた。

「おはよう…いい朝だねー」

伸びを1つ、欠伸を1つすると、彼女の頭が、ノシロの肩に寄ってくる。

「こら！ 俺を枕代わりにするな！」

「あゝも〜眠いよー…」

目を擦り、また欠伸をする。

ノシロは頭を掻くと、フードを深く被った。

「……………」

ウエキは、昔 人を殺した。

猫を守るためとは言っても、その事実は変わりはない。

だから、警察署長になったタガミがやって来たのだ。

ウエキを捕まえに

「ん、なにさ？」

ふっと、振り返る。

昨日の事など、全く覚えてないような感じだ。

まったく　ちょっと心配してやればこれだ。

いつもの能天気で、昨日の出来事がまるで夢のようだ。

いや　夢ならどんなにいいことか。

「なに、人の顔じろじろ見ちゃって!」

「なんでもない」

「もー、ノシロってば!

私の事が好きなら、はっきり言えばいいのにー!」

「ばっ、ばば馬鹿か!」

何言ってるんだ!!

そんなわけあるか!!」

ウエキは唇を尖らせる。

「なにさっ、冗談だよ!

そんなに否定しなくてもいいじゃん」

突然、ウエキが立ち上がった。

「朝ごはんの時間だね！」

こいつ 飯の事しか頭に無いのか？

ウエキは振り返り、ノシロに微笑みかけた。

「私も、猫の一族に生まれたかったな」

「え？」

思わず声が漏れる。

猫の一族に？
変わった奴だ

「だって、そのへんの猫ちゃん見ていると、気ままでいいなあって思
うもん」

「…猫の一族のみんながみんな、気ままというわけでは無いぞ」

「はは、そりゃあねっ！

そうだろうけど」

跳ねた髪を揺らして、言った。

「……人間という立場よりかはいい。

猫を殲滅した、そういう立場よりかは……」

ふっと風が吹いた。

ウエキの髪が優しく揺られる。

「…これからどうするつもりだ」

ウエキの背中は一瞬して見てみると、思ったより小さい。

「んー？ 大人しく捕まろうかな？」

首が右に傾く。

すると、振り返って、舌を出した。

「なんてね。」

まだ捕まらないよ？ 私。もっと楽しみたいもん。逃亡ライフって
いうか？」

くるくると踊るように回るウエキ。

「この街を出るつもり」

小さくジャンプして、バレリーナのように、指先をやりわり伸ばす。

「生まれ育った街を離れるのは、ちょっと心が痛むけどね。

…ノシロともお別れしなきゃ」

優しい笑み、というより、無理をした笑み。

「…いずれ、帰ってくるのか」

「ほとぼりが冷めたら、きつとまた帰ってくるよ」

「そうか」

ノシロはゆっくり立ち上がると、自分のフードに触れた。

「…耳」

「ん？」

「耳、見たって言ったな」

「…え」

大通りには人気が無い。

フードをゆっくり外した。

髪に紛れて、黒い耳が現れる。

「…み、耳…だ…
はは」

その笑った目から、涙が溢れていた。

「あ、う…耳…」

ぼろぼろ溢れていく涙を止めることも無く、口角を無理矢理 上げ
る。

ぎゅっと目をつぶると、涙がさらに溢れ出した。

「…お別れしたくないよー…」

ゴシゴシと擦るように涙を拭う。

ぎゅっと胸が締めまる思いがした。

初めての感情に、思わず自分の胸臆を掴む。

一瞬、この人間を抱き締めたくなった。

だがすぐに、我にかえる。

…これ以上の干渉は良くない。
俺にとっても、彼女にとっても。

「…お別れだね」

無駄な感情は持つな。

いずれ、身を滅ぼす事になる。

「…早く、帰ってこいよ」

絞り出して、ようやく出た声だ。

「……ありがとう。」

またね

語尾を潤わせて、すぐにきびすを返して去っていった。

春の風が冷たく感じて、ノシロは再びフードを深く被った。

9 取引

ウエキが姿を見せなくなって、2週間ほどが経った。

気付けば、猫の事件に関わった人間の数は、数えられるほどになっていた。

…たくさん殺した。

俺がこの手で殺した。

復讐は復讐を生むだけだ　それはわかっている。

全てやるべきことをやれば、死んだっていい。

…でもまだ死ねない。

「……………」

視界のピントを合わせないまま、ただぼーっとしていた。

この静けさにもようやく慣れた。

あの耳元で叫ぶ元気な声や、滅多にしない悲しそうな表情、正体の分からぬ胸の痛みも、もうしばらく出会いそうに無い。

「…静かだな」

思わず呟いた。

さあ今日はどうするか。

…また誰か殺すか？

それとも、今日はしばらくじっとしているか。

ふと、隣に猫が座っているのに気付いた。

黒い斑模様の猫。
少し黒ずんでいて、毛はボサボサだ。

「お前も1人か」

そう言うと、猫はノシロを見上げて、にゃあと鳴いた。

「そうか。俺もこないだ1人になった」

いゃ…

生まれたときから、ずっと1人きりだ。

「どこか行くところでもあるのか？」

偶然か、それとも言葉を理解してか、その猫はふるふると首を振った。

「…俺もだ」

猫の首を撫でた。

ゴロゴロと気持ち良さそうな声を出すと、すっと歩き出した。

立ち止まると、ノシロをじっと見つめる。

大きい瞳の中に、何か暗いものを見た。

見つめたまま、猫は動かない。何かを伝えたいようにも見える。

「…なんだ？」

その言葉を聞くと、猫は去っていった。

「野良猫と会話か？」

その声でふっと顔を上げると、またあの男がいた。

「はて、あの猫は君の言うことが理解出来たのかね？」

微笑している男……間城タガミだ。

「…何の用だ」

「まあそうカツカしないでくれ。

君に、ひとつ聞きたい事があってね……」

キッと、ノシロを見下ろした。

「一緒にいたウエキという女はどこへ行った？」

タガミの話し方に、ぐっと粘りけが増した。

「…まあな」

「ちゃんと答える」

「……」

ノシロは睨み返した。

タガミは、”ハギノ”を捜しているんだ。

決定的な証拠でも見つけたのか、ウエキを”ハギノ”と断定したら
しい。

「俺は知らない」

「見え透いた嘘をつくな。
あの女がお前に、何も言わずに去るとは思えない」

タガミは、深く濁った黒い瞳を細める。

無防備に振り撒く、うわべだけの微笑みからは想像できない表情だ。

…言ったらどうなる。

ウエキは捕まるか？
俺の一言で？

「そつだ、こつしよつ」

タガミが目を細めて言った。

「お前は、あの女の居場所を教える。

私は、滅亡の真実を教える」

「…何？」

滅亡の…真実？

「君なら分かるだろう？」

猫の滅亡のあの日さ。あの日の、真実だ」

何だと　この男。

猫の滅亡の…何を知ってる？

「君は猫の滅亡に興味があるようだからね。

そうだろうか？

…永峰、ノシロ」

「…!!」

俺の名を知っている。

こいつ...どこまで知っている？

俺が猫の一族だということか？

俺が滅亡に関わった人間を殺していることか

「全て、知っているぞ」

その一言に、思わず背筋が凍った。

まるで心の中を全て見透かされたようだ...

「お前は永峰ノシロ、猫の一族の生き残りだな」

認めたくないが、タガミは勝ち誇った顔をしている。

「お前と一緒にいたウエキという女の本当の名は、ハギノだ。写真を見せただろう？」
顔を変え、偽名を使い、10年もの間 罪を償わずに平然と暮らしていたようだ」

ぐっと喉から出かかったものをこらえた。

ウエキは 猫を守ろうとしただけだ。

罪を償うべきなのは、お前たちのほうだ…

「取り引きだよ、ノシロくん」

ノシロと向かい合うようにして、タガミはしゃがんだ。

「私は真実を教えよう。君は、ハギノの居場所を教えてくださいただでいいんだ」

ノシロは、きゅっと口を結んだ。

心臓が高鳴る。心が、真実を知りたいとせがんでいるのが分かった。

でも口は、開けてはならない。

「君に、人間をかばう必要が？」

「……」

その言葉で、胸が熱くなった。

これは…迷いか。

俺は迷っているのだ。

いや迷うな。

言うな。

「俺は……」

人間。

憎い憎い、人間。

人間は俺たちを滅ぼした。

俺は1人きりになった。

人間が戦争なんか始めなければ、こんな感情を抱くことは無かった。

俺という復讐鬼を生む事も無かったのだ。

俺は人間が嫌いだ。

なのに、ウエキと共に長い時間を過ごした…

「…何、してるんだろ…俺は…」

馬鹿馬鹿しい。

何してるんだ、俺は。

人間と馴れ合い？

ふざけている。

人間に滅ぼされたんだ。

何を迷う必要がある？…

「ウエキは2週間くらい前、街を出た。」

とどまっていた、胸の痛みが ふっと消えた。

「…ようやく正気に戻ったらしいな」

タガミは立ち上がると、ふうとため息をついた。

「死に損ないが」

タガミはきびすを返す。

「！ 待て、取り引きは」

膝をつき立ち上がるうしろすと、

「ハッターさ」

タガミの薄ら笑いを浮かべた顔が見えた瞬間、黒く光沢を放つものが見えた。

拳銃だ。

パシュツという音が脳に届く前に、ノシロは意識を無くした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8456m/>

猫の墓

2011年11月16日17時35分発行